C'est bientôt la rentrée !

倉田　清

10月のはじめ、フランスでは秋のひそやかな気配がすでに感じられる頃、数年来懇意にしているToursの古籍商のマダムを訪ねた。2時間ほど書籍や第2次世界大戦後の思想に関する文学書・哲学書のこと、ロワール河流域のぶどうの収獲のことなどについて、彼女とおしゃべりしているうちに、パリへ戻る時間になった。高い天井までの書棚にぎっしり詰まった古書の中で、いとまを告げた。入口まで私を導いてきた美しいマダムは、突然、こう言った。

—C'est bientôt la rentrée, monsieur！（もうじき、新学年ですわね。）

優しい口調だった。一筋の透徹した気が私の心の中を通り過ぎた。美しい発音だった。長いヴァカンスが終って子供たちには新学年が始まる。

—Oui, madame, vraiment...

（ええ、本当に...）と、応えた。

アナトール・フランス（Anatole France, 1844—1924）の流麗な文章を思い出した。

幼少年の想い出である。

Je vais vous dire ce que me rappellent, tous les ans, le ciel agité de l'automne et les feuilles qui jaunissent dans les arbres qui frisonnent ; je vais vous dire ce que je vois quand je traverse le Luxembourg dans les premiers jours d'octobre, alors qu'il est un peu triste et plus beau que jamais ; car c'est le temps où les feuilles tombent une à une sur les blanches épaules des statues.

（私は、毎年、秋の変わりやすい空と、打ちふるえる木々の黄色くなる葉が、私に思い出させることを、これから語ろう。私が十月の初めにリュクサンブール公園を横切る時、私が見るものを語ろう。その頃は、公園はもの悲しく、何時よりも美しい、木の葉が彫像の白い肩の上に一枚また一枚と落ちる時期だからだ。）

パリ・リュクサンブール公園のマロニエの黄色い葉は美しい。マロニエの木陰には、フローベール、ボードレール、ヴェルレーヌ、ショパンなど小説家、詩人、音楽家の像が置かれ、また、春から秋にかけて色とりどりの花が咲き乱れている花壇を見下ろすテラスには、フランス歴代の女王の像が並んでいる。それらの像の真っ白な肩に一枚また一枚とマロニエの大きな葉が散りかかるのである。

アナトール・フランスは、さらに続ける。

Ce que je vois alors dans ce jardin, c'est un bonhomme qui, les mains dans ses poches et sa gibecière au dos, s'en va au collège en sautillant comme un moineau. Ma pensée seule le voit ; c'est l'ombre du moi que j'étais il y a vingt-cing ans...

（その時、私がこの公園で見るものは、ポケットに両手をつっこみ、鞄を背負って、雀のようにぴょんぴょん跳びはねながら学校へ行く小さな子供だ。私の思いだけがその子を見る。それは、25年前の私の姿なのだ...）

... c'est un innocent que j'ai perdu : il est bien naturel que je le regrette ; il est bien naturel que je le voie en pensée et que mon esprit s'amuse à ranimer son souvenir.（... 私が失ったのは、無邪気な子供なのだ。私が彼を懐かしく思うのはとても自然なことであり、私が彼を思考のうちに見、そして、私の精神が彼の思い出を甦らせて楽しむのは、とても自然なことだ。）

Il y a vingt-cinq ans, à pareille époque, il traversait, avant huit heures, ce beau jardin pour aller en classe. Il avait le cœur un peu serré : c'était la rentrée.

Pourtant, il trottait, ses livres sur son dos, et sa toupie dans sa poche. L'idée de revoir ses camarades lui remettait de la joie au cœur. Il avain tant de choses à dire et à entendre.（25年前の、同じ時期に、彼は8時前授業に行くためにこの公園を横切っていた。彼はすこし心をしめつけられていた。新学期だったから。しかし、本を背負い、ポケットに独楽（こま）を入れて、足早に歩いていた。友だちにまた会うのだという考えが、彼の心に喜びを与えていた。言わなければならないこと、聞かなければならないことがたくさんあったのだ。）

Rentrée（新学期）というのは、子供の純真な心にとって、確かに、嬉しい、だが、それでいて、もの悲しいものではある。